

巻頭言

農家と異国の花嫁

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

徳島県の農家の跡取りが、集団で比国に花嫁探しに行き、そのうち6人は、現地で結婚式を挙げ、花嫁を同伴して帰国したという。なんとショッキングな出来事である。

農家に花嫁のきてがなく、村役場も、農協も、その対策に頭を痛め、花嫁一人を世話してくれた仲人婆さんに、その度ごと、10万円の報償金を提供している話は、そちこちで耳にするとところであるが、先般、北海道の牧場の跡取りをつのって催した集団見合いパーティは、出席者の女性全部が東京のプロだったということがわかって、話題となったが、インチキ金儲けの道具となるほど、嫁不足は深刻な社会問題である。

農家の嫁に成り手が少ないという原因は、一つは農村の封建性にあり、他の一つは女子教育の普及にある。朝（アシタ）に星を戴き、夕（ユウベ）に月影を踏んで帰る式の、農家の重労働は、農作業の機械化に伴ってほとんど解決したが、農村の封建制は依然として残っている。数世代同居の農家の花嫁は、爺サマ、婆サマが財布のヒモを握っていて、小遣錢にもコト欠き、実家のお袋のヘソクリのおこぼれをかすめ取ってこない、わが子の菓子代にも困ってしまっている。

従って、現金収入といった大袈裟なものではないが、金を得る手段として、農家の花嫁がパートを志願し、大都市周辺では、わが子

を年寄りに預け、終日オフィスで働いて、家計収入の担い手となってきた。しかし、一旦不景気が襲来するとなると、真ッ先に整理されるのは、このパート組で、農水省の調査でも、パート組の帰農が目立ってきたという。

「農は国の大本なり」などと、おだてても、農家に嫁のきてがなくては、農村の崩壊につながる。徳島の花嫁探しのツアーに参加し、青い鳥ならぬ花嫁を手にして帰ってきた青年の一人は、39歳であったという。親も、親戚も、放任していたわけではないだろうと想像するが、それにしても残酷な話である。

いま、東京にだけでも、外国人が16万人居住していて、病人も発生し、都立病院が応待に困っているというニュースである。古事記、日本書紀を見ると、わが国の農業は、多数の渡来移住者によって開発されたことは、明白だから、農家の花嫁に、異国女性を迎えることが不適當だというのではない。国際結婚も少なくないことは分るが、農家の跡取りに嫁のき手がなくて、嫁探しに海外に赴くということは、別の問題である。

農水省に、農村人口基盤整備課のようなセクションを設け、農村の花嫁充足のキャンペーンを実施し、全国的な規模で、この農村の根幹にかかわる社会問題を解決する対策を、組織的に、制度的に、推進すべきではないだろうか。